火伏地蔵と経石塔

佐脇貫一
（会員・佐伯市長良）

一木地蔵尊のまつり

一月二十四日の朝、津志河内部落の有線放送は「今日は〝一木さま〟のおまつりだから、みんなお参りするように…」と放送した。一木さまとは部落を一目に見おろす東の山の尾（標高八〇メートル位）に安置されている地蔵菩薩である。この日部落の篤信者らは、早朝から地蔵尊の宝前を清め、香華を薫き供物をそなえ、僧侶に読経を請うて、一年中火災のないことを祷る。そして参詣する部落の人々に〝お接待〟の餅・菓子等を配り供養する。

テレビ塔にのぼる登山道の最初の鞍部から分れる杣道を、ちゅうべつとうという谷の尾根へ、一〇〇メートルばかり登ると、数株の桜樹に囲まれた一画に、大岩を背にして一つの石龕（がん）があり、一体の地蔵菩薩が在します。宝冠（長い白木綿で頭を包み巻く頭巾の一種）を被り、法衣をまとい、左手に宝珠（如意宝珠）右手に錫杖を持つ半跏趺座（はんかふざ）像（片足を他の足の股上に組んで座っている像）である。もっとも現在では錫杖がなくなり、右脚の上に香炉のようなものが置かれている。この地蔵尊像には（石龕にも）刻銘がないので、造立の年月がわからないが、いわゆる〝一木さま〟まつりは愚妻の幼少時からあったというから現尊像も数十年は経っている。

一木さまはまた〝火伏せ地蔵〟といわれ、佐伯市をはじめ郡内各町村にそれぞれ部落単位で祀られている。呼称は一木・市木・火伏せなど部落によって違うが、いず

れも延命地蔵尊の石像が多い。

昔から火伏せ（火防け）地蔵は勝軍地蔵であるといわれている。勝軍地蔵は愛宕権現の本地仏で、その名称は悪業、煩悩の軍に勝つという意味、そこで戦勝をもたらす仏として中世武士とくに足利将軍家に尊崇された。しかし、民間では火防の神、京都嵯峨の愛宕権現の本地仏として信仰された。勝軍地蔵の像容は頭に冑を戴き、身には鎧をつけ、太刀を佩き幡をなびかせているが、江戸時代の石仏は甲冑をつけ、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ立像、また馬に乗る像もある。

佐伯地方にある火伏せ地蔵（一木地蔵）はその解義からすれば勝軍地蔵でなければならないが、ほとんどが延命地蔵（僧形で左手如意珠、右手に錫）である。勝軍地蔵の甲冑はとにかく、菩薩であるからには宝冠を戴き、瓔珞などで身を飾らなければならないが、これは衆生に近づきやすいようにと、頭をまろめ法衣をまとった法師（比丘）の姿になっている。

さて、一木さまこと一木地蔵尊は日向国臼杵郡（現宮崎県東臼杵郡）北郷村宇納間の市木の山に安置された地蔵菩薩、つまり市木の地蔵さまである。しかし、元禄元年（一六八八）に宇納間部落の鉄城山全長寺（曹洞宗）に移されたので、一般には宇納間地蔵で通っている。よく旧家の台所など火扱いをするところに「南無地蔵大菩薩火防御守護祈攸・宇納間全長寺」という護符がはってあるのを見かけるが、これは宇納間全長寺が出した火伏せ地蔵の呪符である。

伝説によると宇納間地蔵は「行基菩薩」といわれる奈良時代の聖僧行基が、諸国行脚の途次この宇納間の市木の山に籠って、一刀三礼して延命地蔵菩薩の尊像を刻み浄地に安置した。下って平安末期、天台宗の僧正岸がこの尊像を本尊として一寺を創め、延命院宝蔵寺と称したが、天正十五年（一五八七）薩州勢が日向に侵攻した折兵火によって焼失した。その時地蔵尊像は背後の山中に飛来して無事であったという。

また次のような話もある。享和元年（一八〇一）にあった江戸大火の時、延岡藩主内藤政義の江戸藩邸も類焼のおそれがあった。信仰心の厚い政義は類焼の厄をまぬがれるようにと神仏の加護を祈願したところ、一人の異形の僧が突然屋根の上に現われ、しきりに防火につとめたので、藩邸は類焼せず無事であった。鎮火後、政義は

かの異形の僧を探し求めたが、どこにもその姿が見えなかった。その夜政義の夢枕にかの僧が現われ「われは領内宇納間の地蔵である。汝の切なる願いによって防火したのだ」と告げた。やがて藩地延岡に帰った政義は、領内巡視のみぎり宇納間全長寺に詣で、地蔵菩薩の宝前に防火の御礼を言上、とくに寺僧に命じて地蔵菩薩尊像の保護をさせた。こうした話が伝わると宇納間の火伏せ地蔵の評判が高くなり、領内はもとより各郡各地からも火防祈願に参詣する人々が多く、各地に講ができるようになった。なお佐伯地方の一木（市木）地蔵のまつりは、宇納間地蔵の縁日旧正月二十四日にあやかって同日行なわれていたが、近年はたいてい一月二十四日に行なっているようである。

津志河内の庚申塔

こんもりした社叢に囲まれた氏神社（玉垂神社）の石段をのぼると、境内台地の右側に庚申塔が並んでいる。まともに立っているのが九基、塔身が倒れているのが三基、台石だけ残っているのが五基、都合十七基が造立されているはずである。

ここの庚申塔は全部が〝文字塔〟で〝像塔〟は一基もない。刻まれた文字は「庚申塔」「奉献庚申塔」「奉待庚申塔」「庚申石塔」「青面金剛」など。墓塔型のものが主で、自然石が二基、材石はほとんどが灰石、花崗岩が三基ある。刻字のわかる石塔でもっとも古いのは宝永二年（一七〇五）造立のもので、材石は花崗岩、庚申石塔と彫り、その下に講中と思われる三股甚助ほか六人の名が刻んである。（三股甚助は当時の庄屋）また享保十一年（一七二六）十二月造立のものも花崗岩で、これには中央に青面金剛、その両脇に年月日、下に講中十三人の連名がある。自然石の二基は塔型から元禄期前後のものと思われるが、線刻に近い彫りで一基に奉待庚申塔と読めるだけ。塔群の左端二基は灰石で万延元年（一八六〇）庚申、右端三基は明治四十一年（一九〇八）戊申の建立、いずれも申年に造っている。

この石塔のあり方から推察すると、津志河内の庚申待はいわゆる幕末から明治末年までが最盛であったようで庚申信仰が全国的に盛んになった宝永ー元禄期から幕末万延年中にいたるまでは石塔（年月のわかる）がなく、その状態がわからない。もっとも庚申講のあったのは大

正初期までというから明治四十一年ごろが境で、以後次第に下火になったものだろう。

明治四十一年九月造立の三基には次の氏名が刻んである。〔右〕三股半治郎・三股平十・三股武吉・三浦佐次郎・御手洗八蔵、〔中〕田原六助・小野源吉・三股要三郎・御手洗栄太郎・河内長次郎・長田桂蔵・三股源六・小野リウ、〔左〕三浦松治郎・三浦要治郎・三浦庄太郎。

それでは庚申塔とは何かというと、庚申さんの供養（庚申待・庚申講）のために造られた塔で種々の塔型があるが。佐伯地方のものは墓塔型がもっとも多く、ほかに笠塔婆、板碑、石幢、磨崖仏などがあり、また自然石のものもある。庚申塔が造立されるようになったのは室町時代からといわれ、それ以前の庚申待（守庚申）は土盛りの庚申塚で行われたという。現在佐伯地方に残っている庚申塔のほとんどは江戸時代、それも宝永・元禄期以後のものが多いが、下堅田地区西野に一基、県下で最古といわれる天正四年（一五七六）十二月造立の文字塔が残っている。この文字塔というのは彫刻による塔型で、塔面に庚申、庚申塔、庚申塚、庚申供養塔、青面金剛、青面金剛童子、猿田彦大神などと刻んであり、像塔には青面金剛像（全国的に最も多い）、猿田彦大神像、地蔵像、帝釈天像（石幢）、閻魔王像（同）、道祖神像などがある。

庚申塔の「庚申」とはいうまでもなく干支（エト）の一つで、十干（かん）の七番目の庚（カノエ）と、十二支の九ッ目の申（サル）を組み合せたもの、これを日にあてたのが庚申の日である。十干十二支を順繰りに組み合せると六十とおりになるから、六十日に一度の割りで庚申の日が回ってくる。この日庚申待とか申待（さるまち）という行事が行なわれる。

六十日に一度めぐってくる庚申の日に、その夜を眠らずに過ごして健康長寿を願う信仰がある。これを守庚申とか庚申待という。この源流は、人の身中にあって人を短命にする三尸（さんし）を除去して、長生を願う道教の信仰にある。道教の経典を集録した「道蔵」のなかに多くの「三尸を除く方法」があげられているが、庚申の夜〝守庚申〟（庚申待）を行うのもその一方法である。平安・鎌倉時代は庚申の夜、詩歌管絃の遊びをして眠らずに一夜を過ごし、これを守庚申といったが、室町時代以降になると、庚申の本尊をかかげ、宗教的

儀礼の勤行を行ないその夜を過ごす庚申待を行なった。そして庚申待には講的な結衆が組まれ、一定の宗教的儀礼がいとなまれた。＝日本石仏事典から＝

佐伯地方で行なわれた庚申待はだいたい次のようなものであった。講中は五、六人から十人前後で、順ぐりに座元になる。座元というのはその夜の庚申待をする講中の当番で、当元とも言われている。庚申の日の夕方、講中は座元の家に集まり、「庚申さん」と呼ばれる掛軸を床の間に懸け（猿田彦神が多い）、燈明をあげ供物をそなえて、その前で庚申の真言を唱える。終って座元が準備した夜食を食べながら、部落のこと、農事のこと、世間話などを互いに歓談、夜明しする。しかし、こうした農村中心の行事も、時代の進展でしだいに色あせたものになり、ついには失われてしまった。

庚申さんは仏教では青面金剛、神道では猿田彦神を本尊にしているが、その信仰の源流は道教の三尸（さんし）説である。〝人間の身体の中にいる上尸（彭倨）・中尸（彭質）・下尸（彭矯）という三匹の虫は、庚申の夜、人の睡眠中にその身体を抜け出して、天に上り天帝に罪過のすべてを告げる〟そこで庚申の夜眠らずに三尸虫の抜け出すのを防ぐのが、守庚申つまり庚申待である。

青面金剛はまた青面金剛童子といい陀羅尼集経に現われる夜叉（やしゃ）鬼で、これに祈れば病魔・疫鬼が退散するという。この行法は伝尸（でんし）病（肺結核）の予防・治療を祈る魔法とされたところから、三尸を除く庚申信仰に結びついたものらしい。

猿田彦神が庚申さんになったのは江戸時代中期からで、山崎闇斉の垂加（すいか）神道の説によるもの。佐伯地方の庚申塔には青面金剛の像塔は多いが、猿田彦神は少ない。（青山地区に一基ある）

経石様について

津志河内村地（じ）下の消防器庫前に「経石さま」とよばれる角柱型の石塔がある。昔は小字折戸にいたる分岐路の道側に、北面して建っていたもので、一石一字写経塔である。

正面に「大乗妙典一石一字塔」、右側面から背面にかけて銘文（願文）と偈およびこの筆者、龍鼎山養賢寺現住匡山の名が記るされている。また右側面には「維嘗元文三龍集戊午夏（干支のようにも見える）五月如意珠、施主

津志河内邑善信沙弥等」と刻んである。塔面に欠落が多く全体的に読みにくい。

一石一字塔は写経塔の一つで、経典を地中に埋めて釈迦滅後五十六億七千万年を経て、この世に現われ衆生を済度する弥勒菩薩の、出現に備えるという埋経の思想と結びついて、経文を小石に写して埋めたもので、この石塔の地下には、経文の字数だけの小石に、一石に一字ずつ書写された「お経」が埋められていたはずである。

欠落して読みにくいが銘文（願文）の大意は、大水害や蝗害による飢饉の犠牲になった、人畜の供養のために造立されたもので、伝えるところでは、大洪水のためこの辺りまで堅田川の濁流が氾濫し、死者数人が出たというから、水害犠牲者の供養と災禍による損毛の防除を併せ祈ったものであろう。津志河内邑の人である善信沙弥が施主になって、大乗妙典（大乗の経典）を一石に一字ずつ書写して埋め、養賢寺十世住持匡山座元に頼んで、願文と偈を書いてもらったものである。

さて、大乗妙典であるが、ここでは法華経（妙法蓮華経の略）普門品（法華経第二十五品・俗に観音経という）あるいは般若経（金剛般若波羅密多経・金剛般若経）または般若心経（単に心経ともいう）を指すが＝以上天台宗、禅宗＝真言宗系では理趣経（般若理趣経）を指すことになる。

この経石塔の願文と偈を書いた匡山和尚（座元）は大分郡稙田村（現大分市）の人である。匡山は享保二十年（一七三五）十一月、時の佐伯藩主毛利高慶（六代周防守）に招かれて、城内で観音経（普門品）の講義をしたという学徳の秀れた禅僧であった。そのころ匡山は米水津村浦代の養福寺住持だったが、ここにおいて当時宝林院（城外臼坪字岡）に退隠していた養賢寺九世住持乾堂大和尚の法嗣として十世住持になった。

次に造立の年月であるが、「維旹」は〝これとき（旹）〟あるいは〝ときこれ〟と読み、「元文三龍集」は元文三年ということで、龍集は年に代えて年号の末尾につける語。戊午は干支、その下の字は判りにくいが五月と続いているので夏（五月は仲夏）と読んだ。「如意珠」は如意宝珠の略で、解には「尊き珠を意味し、これを持てば所願意の如くなる。」とあるから、願成就を念じた語である。なお施主善信沙弥は津志河内村の人で、得度（剃髪して僧体となった）した在家人、おそらく庄屋の

隠居というところだろう。

享保末年から元文年中にかけては全国的に大水害や蝗害など飢饉をともなう大災害が多かった。佐伯地方でも享保十七年（一七三二）の蝗害による大飢饉、同十九年（一七三四）の大暴風雨による大洪水があり、その後二年程は平穏であったが、元文二年（一七三七）には九月四日、五日にかけて大風雨大洪水で、各川の土手が崩壊家屋、田畑の被害が激甚であった。津志河内村に一石一字塔が造立されたのは翌三年五月だから、記録はないが前年九月の大水害はずいぶん激しかったのであろう。ところが佐伯藩の旧記によると、この年八月（元文三年）にも、また四年八月にも、佐伯地方に大暴風雨洪水があり、河川（番匠川）の水位が平時より八尺から一丈にのぼったと記録されている。村民が毎年（昨年は八月二十一日）登熟期を前に平穏息災を経石塔に祈願したのも当然であろう。

寄贈図書紹介

津久見市誌

A5判
七八一頁

津久見市が市制施行三〇周年記念として発刊されたものをご寄贈いただいた。

編集委員長橋本操六氏、監修者渡辺澄夫氏である。

監修者の刊行祝詞の中に

「県下各専門分野の執筆陣を揃えこの種市町村史の第一級のもので、まさにその範として恥じないもの」

とある。これにより多言を要せず。